

映画とテレビドラマにおける断り表現の日米語対照研究

異文化コミュニケーションゼミナール 1415004 井尻 力

1. 研究動機・研究目的

言語は多種多様に変化するものである。国や地域、また話される状況、話す相手によって話し方や身振り、伝え方までもが変わるのである。特に感情や考えを伝える場合は国や地域で著しい差違がみられる。例えば、アメリカ人同士では自分の考えや思っていることは積極的に発信される。米国でなにより避けるべきものは「だんまり」や「自分から情報を発信しない」行為である。そうしなければ米国ではそこにいないと認識される。その為、米国では自分を積極的に表現する人が多い。一方日本では、自分の考えや感情より周囲の人に合わせて本当に思っていることは発信されない場合が多々ある。日本は昔から集団で動くといった文化を持つ民族であり、話し言葉以外にもコミュニケーションツールを持っていた為、自分を表現しない傾向が強いのではないかと。周囲の人間関係を重視される風潮がある日本と米国とのコミュニケーションには、どのような違いがあるのか。特に人間関係を損ないやすい断り表現の中で、日本と米国では、どのような差違があるのか疑問に思い本研究を始めるに至った。本研究では日本人と米国人のコミュニケーションに着目しながら、断り表現のにおいて、どのような差違があるのか観察し、比較・検討していくこととした。この研究を通して異文化コミュニケーション能力の向上と異文化理解を深めることを目的とした。

2. 研究方法

本研究では、米国と日本における日常的な会話からビジネスまでの談話を分析対象とし、それらの場面の会話を詳細に記述し、その特徴について分析を行った。また、米国と日本の特徴を比較し、類似点や相違点を検討した。分析対象は、言語表現のみではなく非言語表現も含むこととした。具体的には、まず、言語表現と非言語表現について明らかにした。その次に日本人の断り表現と米国人の断り方を具体例と共に示し、データ分析を行った。また、1回分の発話行為の中で日米でどの程度差違がみられるのか明らかにし、分析を行った。収集したデータから発言の背景や文化的特徴を考慮に入れながら、分析を行った。

3. 主な結果と考察

分析結果をもとに日米の映画・テレビドラマにおける断り表現の類似点、相違点、特徴について考察した。

まず、日本の映画・テレビドラマにおいて、上司と部下の会話の中での断り表現が76%と非常に高い数値を示した。その他の分析項目で、友人が12%、恋人間が5%、その他の知り合いや初対面の談話では6%と低い数値を示す結果となった。それに対し、米国の映画・テレビドラマでは、上司と部下の会話で44%、友人が7%、恋人も7%、その他の知り合いや初対面で42%と部下と上司とほぼ同じ数値を示した。日本の映画・テレビドラマにおい

て日本人は、仕事となれば断れるが、プライベートといった私生活の状況となればほとんど断り表現を用いないということが考えられる。本研究を分析するにあたり多くの日本映画・テレビドラマの比較研究を行ったが、きっぱり断る描写は観察されなかった。断る表現の中には「ダメだ」や「いらない」、「行かない」などといった自分の意志をはっきり相手に伝えるシーンはみられなかった。一方、米国の映画・テレビドラマにおいては、断る際には、“NO”や“Never”、“I don't need~”というように必ず分の最初に否定語を発することで断り表現を行っていた。次の言語表現と非言語表現については日本の映画・テレビドラマが言語表現 81%、非言語表現が 19%に対して、米国の映画・テレビドラマは言語表現が 77%、非言語表現が 23%という数値で、日米での差違はそれほど観察されなかった。しかし、言語表現と非言語表現の数値の差は日米ともに言語表現の方が高く、意思伝達においては、言葉も重要な役割を担っていると考えられる。最後の状況毎の表現については、日米ともに差違はみられなかった。

4. 結論

日本と米国の映画では、作成方法が全く異なる為、一概には言い切れないが、日本のシーンは断る際に決まった文型があり、それが例えば「申し訳ございません」や「大丈夫です」などの歪曲表現が日本で発達したことが考えられる。米国では“I'm afraid that~”などがあるが日本はクッション言葉が多く、そういった言語を多様に使用してた為に、米国に比べて素直に自分の考えを伝えない。あいまいな表現につながったのではないか。だが日米を比較して優劣をつけることが本研究の目的ではない。日米互いの文化的な特徴を発見し相互理解と交流に役立てるためにはお互いの文化を尊重しながら文化を理解していくことが重要である。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究を通して、私はより一層異文化を理解することに興味を持った。日本の映画・ドラマと米国の映画・ドラマの分析を通して感じたことは、数値化してみると多くのことが言語化されているということであった。私は来年度の 4 月からホテルで働く。ホテルには日本人のみならず、海外の人も利用することが多くなってきている。海外から多くの外国人が観光や留学などで日本を訪れる人も増加傾向にある為、本研究で分かったことは活用したい。その際に些細なサービスや気配りができるホテルマンとして働きたい所存である。本研究を行うにあたり、ゼミナールの先生である須藤路子先生には、心から感謝しております。私たちゼミナール生の為に多くのことを教えていただき誠にありがとうございました。多大なるお力添えを頂いたことに心から感謝しております。また大学に進学させてくれた両親、大学で出会った友人、並びに 4 年間お世話になった大学関係各位の皆さまにも感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。今後私のさらなる成長と躍進を誓い、結びの言葉とさせていただきます。